



# Megaptera

発行；小笠原ホエールウォッチング協会 (OWA) 東京都小笠原村父島宇西町 04998-2-3215 メガプテラ=ギリシャ語で「大きなヒレ」  
04998-2-3500 (FAX)

## 待望のニタリクジラ発見す！

OWA調査委員会 菅 沼 弘 行  
目視調査団長



撮影 菅 沼 弘 行



小笠原諸島南東海域（北緯二五度三〇分〜二七度、東経一四二度三〇分〜一四四度三〇分）で、昨年引き続き鯨類の目視調査を行った。

五月二三日、午後四時二見港を出港し一路東に向い夜走りをする。一五時間、その間向風に悩まされ睡眠もままならず、一部の調査団員（団長？）は船酔いのため歩行も困難な状態に陥った。

夜が明け翌二四日、父島では記録的な大雨だったようであるが、海上は多少の風波を見る程度で八時より調査が開始された。しかし、双眼鏡を覗いて調査できる海況ではなく、何も発見はなく時間は刻々と過ぎていく。次第に

風も強くなり、見張り台に昇るのも危険になったため五時前に調査を終了した。明日はこの状況では帰港しなければならぬかと、梅雨時の調査を計画したことを反省しながら眠りにつく。

翌二五日、目を疑うばかりの視界三六〇度の風。これは幸先が良いと今日の発見に期待をしながら船を走らせる。ただただ風。ミズナギドリが飛び交い、トビウオが宙を舞う。海を見る目は虚ろ。午後三時一一分、突然筒井調査員の「ブロー、ブロー」の叫び声がある。それと同時に見張り台とキャビンをつなぐインターホンから、高橋調査員の緊張にふるえる「ブ、ブ、ブ……」のクジラ発見の連続音もする。待望のニタリクジラである。全長九m小振りなニタリクジラ、一頭悠々と大海原を楽しんでるように見える。船を止めると、船に興味があるのかゆったりと寄ってくる。舷側からの距離三m、頭をあげブローを一回、水深一・五m程のところを横になりながら調査団の一同を見上げながら過ぎていく。二回目の大接近、スマートな体形、真っ白な腹、小さな背びれ、華奢に見えるが力強い尾びれ、ダルマザメに食われた跡などじっくりと観察する。やがてクジラは船から離れ、何事もなかったかのようにゆっくりと水面に波紋を残しながら去っていった。

この後、調査員達の目付きが変わり残りの二日間、目を充血させ海面を食い入るように見つめる。数百等のマダライルカ、三頭のアカボウクジラの非常に珍しい大接近、その他カジキの背びれやカツオの群れ、サワラのジャンプ、発光するアカイカなどを発見し、満足のいく調査は終了した。